

ダニエルの書 - 第九十九番

終末の時代と神の裁き——預言的洞察を解き明かす

Jeff Pippenger

2024-02-29

「終わりの時」は、第一の天使の運動において審判の開始が告げられることを表し、また第三の天使の運動においては審判の終結が告げられることを表している。「終わりの時」において神の民は、神の審判を告げ知らせるために起こされてきたし、今も起こされている。しかし、神の審判の使者となるためには、その審判を理解していなければならない。学ある者もない者も含めたラオデキア的アドベンチズムの主要な特徴は、彼らが神の審判を知らないことである。すべての預言者は、自分たちの生きた時代よりも、むしろ終わりの時代に対して、より具体的に語っている。

古代の預言者たちは皆、自分たちの時代のためというよりも、むしろ私たちのために語った。ゆえに、彼らの預言は私たちに対して有効である。「これらのことはすべて彼らへの模範として起こり、また、世の終わりが臨んでいる私たちを戒めるために書かれている。」第一コリント 10:11. 『セレクトッド・メッセージ』第3巻、338ページ。

すべての預言者は互いに一致しているので、彼らの預言は皆、同じ幻を示しており、その幻とは終末、すなわち裁きの日々のことである。

そして、預言者の霊は預言者に従う。神は混乱の神ではなく、平和の神である。これは聖徒たちの諸教会すべてにおいても同じである。コリント人への第一の手紙 14:32, 33.

エゼキエル書八章から始まるエゼキエルの幻に描かれているエルサレムは、神の教会、すなわち終わりの時代のラオデキアのセブンスデー・アドベンチスト教会である。エゼキエル書八章と九章は、神の家の裁きの結末において二つの種類の礼拝者を示している。一つは太陽にひれ伏す二十五人の古老によって表されているが、教会とこの地で行われている忌むべきことのために嘆き叫ぶ者たちは、神の印を受ける。十一章では、エゼキエルの幻は太陽にひれ伏す二十五人への罰の描写を続ける。

また、霊が私を引き上げ、私を主の宮の東の門、すなわち東に面している門へ連れて行った。すると、その門の入口に二十五人の人がいた。その中に、民の君たち、アズルの子ヤアザニヤと、ベナヤの子ペラテヤがいるのを見た。そこで、彼は私に言った。「人の子よ、この者たちはこの町で災いを企み、悪しき助言を与える者たちだ。彼らは、『時は近くない。家を建てよう。この町はなべ、われらは肉だ』と言っている。だから、彼らに向かって預言せよ。預言せよ、人の子よ。」すると、主の霊が私の上に臨み、私に言われた。「語れ。主はこう言われる。イスラエルの家よ、あなたがたはこう言った。わたしはあなたがたの心に浮かぶ思いをことごとく知っている。あなたがたはこの町で殺した者の数を増し、その通りを殺された者で満たした。だから、神である主はこう言われる。あなたがたがその中に横たえたあなたがたの殺された者たち、彼らこそ肉であり、この町こそなべである。しかし、わたしはあなたがたをその中から引き出す。あなたがたは剣を恐れた。わたしは剣をあなたがたの上にもたらず、と神で

ある主は言われる. わたしはあなたがたをその中から連れ出し、異国の者の手に渡し、あなたがたの間にさばきを行う。」 エゼキエル書 11:1-9

エルサレムは「大釜」（つまり鍋）とされ、エルサレムの人々は、その釜の中で煮られている「肉」である. 手に滅ぼす武器を持つ天使たちによって、十四万四千人の封印の時（ホワイト姉妹は、エゼキエル書九章の封印は黙示録七章の封印と同じだと言っている）に行われる悪者への裁きには、悪者がエルサレムから取り除かれるという真理が含まれている. 間もなく来る日曜法の時に、霊的エルサレムは清められ、すべての山々の上に旗印として高く掲げられる.

終わりの日に、主の家の山は山々の頂に堅く立ち、丘々よりも高くそびえ、すべての国々がそこに流れて来る. 多くの民が来て言う. 「さあ、主の山へ、ヤコブの神の家へ登ろう. 主はその道を私たちに教え、私たちはその道筋を歩もう. 律法はシオンから出、主のことばはエルサレムから出るからだ。」 イザヤ書 2:2, 3.

日曜法の時にエルサレムにおいて達成される清めとは、ラオデキヤ的なアドベンチストが取り除かれ、フィラデルフィア的なアドベンチストだけが残ることである. そのとき、法人組織としての法的枠組みは終わりを迎える. というのも、1863年に結ばれた法的取り決めにおいてはアメリカ合衆国政府が支配権を持つ当事者であり、アメリカ合衆国政府が全土に日曜遵守を強制する時、セブンスデー・アドベンチスト教会の法人組織は法的に解散されるか、あるいは名称が法的に変更されて「サンデー・アドベンチスト教会」のようなものになる可能性があるからである.

滅びの天使たちによってエルサレムの悪者たちが大釜から取り除かれるとき、ラオデキヤ的なアドベンチスト教会は終わりを迎え、フィラデルフィア運動が、旗印として掲げられる霊的エルサレムとなる. ミカは、イザヤが「光を闇と呼び、闇を光と呼ぶ」嘲る者たちと呼ぶ古老たちに語りかけ、問いかけを通して、その古老たちが「さばき」を知っているべきであったことを示す. 彼らは自分たちの訪れの時を知っているべきだった.

そして私は言った. 「ヤコブのかしらたちよ、イスラエルの家のつかさたちよ、どうか聞け. 裁きを知るのはあなたがたの務めではないか. 善を憎み、悪を愛し、人々から皮をはぎ取り、骨から肉をはぎ取る者たちよ. あなたがたはまた、わが民の肉を食らい、その皮をはぎ取り、その骨を砕き、鍋に入れるために、釜の中の肉のように、細かく切り刻む。」 ミカ書 3:1-3.

神は、終わりの時代の民が「裁きを知る」ことを意図しておられ、今もなおそう意図しておられる. そして裁きは単一の概念ではない. それは、いくつかの要素と特定の道しるべを備えた、漸進的な歴史である. 1798年に始まり、千年期の終わりまで続く、預言的な期間である. それは審査的でもあり、执行的でもある. それは、地上でこれまで生きてすべての人間に対して、また天から追放された御使いたちに対しても行われる. 裁きの諸時期を理解することは、終わりの時代の神の忠実な者たちにとって不可欠である. というのも、ミカの問いへの答えは「そうだ、イスラエルは裁きを理解すべきである」だからである.

エレミヤは、終わりの日のエルサレムの長老たちが、「絶え間ない背信」の極致を体現していると指摘する. これは、反逆が段階的に激化していく四世代によって示され、エゼ

キエル書8章の四つの段階的に増す忌むべきことによって象徴されている。エレミヤはまた、長老たちが「太陽と月と天の万象」を「礼拝」しているため、心霊術にのめり込んでいると見なす。彼は、彼らが「倒れて、起き上がらない」のは、「主のことばを退けた」からだと述べる。こうした特徴から、エレミヤは「この民は主の裁きを知らない」と断じる。

その時、主は言われる、彼らはユダの王たちの骨、ユダの君たちの骨、祭司たちの骨、預言者たちの骨、そしてエルサレムの住民の骨を、その墓から引き出す。そしてそれらを、彼らが愛し、仕え、従い、求め、拝んだ太陽と月と天の万象の前に広げる。それらは集められることも、葬られることもなく、地の面の肥やしとなる。わたしが彼らを追いやったすべての場所で、この悪しき家から生き残った残りの者は皆、いのちよりも死を選ぶ、と万軍の主は言われる。さらに、あなたは彼らに言え。主はこう言われる。人は倒れて起き上がらないだろうか。人は背を向けて戻らないだろうか。それなのになぜ、このエルサレムの民は絶え間ない背信によって後退しているのか。彼らは偽りに固執し、立ち返ることを拒む。わたしは耳を傾けて聞いたが、彼らは正しく語らなかった。だれも自分の悪を悔いて、「私は何をしたのか」とは言わない。皆それぞれ自分の道へと向きを変え、馬が戦いに突入するように突き進む。たしかに、空のこうのとりでさえ、その定められた時を知っている。やまばとと鶴とつばめも、その来る時を守る。しかし、わが民は主のさばきを知らない。どうしてあなたがたは、「私たちは賢い。主の律法は私たちのもとにある」と言えるのか。見よ、まことにそれはむなしくされている。書記の筆はむなしい。知者たちは恥じ、うろたえ、捕らえられる。見よ、彼らは主のことばを退けた。彼らのうちにどんな知恵があろうか。エレミヤ書 8:1-9。

第5章で、エレミヤは主の裁きを知らない者たちを「愚かだ」と見なしている。

エルサレムの通りを歩き巡れ。今見よ、知れ、その広場で探せ。もし一人でも、裁きを行い、真実を求める者を見いだすことができるなら、わたしはこの都を赦そう。たとい彼らが「主は生きておられる」と言っても、まことに彼らは偽って誓っている。主よ、あなたの御目は真実に注がれているのではありませんか。あなたは彼らを打たれたが、彼らは嘆かなかつた。あなたは彼らを滅ぼされたが、彼らは懲らしめを受けることを拒んだ。彼らは顔を岩よりも堅くし、立ち帰ることを拒んだ。それゆえ、私は言った。確かに彼らは貧しい者たちで、愚かだ。彼らは主の道を知らず、自分の神の裁きをも知らないのだ。エレミヤ書 5:1-4。

終わりの時代におけるラオデキア的アドベンチズムでは、十人の乙女のたとえの愚かな乙女として表されている人々-ホワイト姉妹がそれは「アドベンチストの民の経験」を表すと述べている-は、「主の道を知らず、その神のさばきをも知らない」。次の章でエレミヤは、「主の道」とは「いにしへの道」であると明らかにするが、愚かなラオデキア的アドベンチストはそこを歩むことを拒み、ラッパの音にも耳を傾けようとしない。「ラッパ」はさばきの象徴であり、もちろん、愚かなラオデキア的アドベンチストはそれを知らない。

主はこう言われる。道に立って見よ、昔の道、どれが良い道かを尋ね、それを歩め。そうすれば、あなたがたは魂の安らぎを見いだすであろう。しかし彼らは、「そこを歩

まない」と言った。また、わたしはあなたがたの上に見張りを立て、「ラッパの音に耳を傾けよ」と言った。しかし彼らは、「聞き入れない」と言った。それゆえ、国々よ、聞け。会衆よ、彼らのうちに何があるかを知れ。地よ、聞け。見よ、わたしはこの民に災いをもたらす。すなわち彼らの思いの実を。彼らがわたしの言葉にも、わたしの律法にも耳を傾けず、これを退けたからである。エレミヤ書 6:16-19

「ラッパの音に耳を傾ける」ことと、後の雨の「休息」が見いだされる「古い道」を「歩む」ことを拒んだ「会衆」に「悪」が臨むのは、まもなく来る日曜法の時に、その「会衆」が「彼の律法を退ける」ときである。

エリヤの三重の適用は、間もなく到来する日曜法によって開始される執行審判の時期における、使者と運動の働きを指し示している。エリヤの三重の適用と密接に関係しているのが、契約の使者のために道を備える使者の三重の適用である。道を備える使者の三重の適用は、調査審判の時期における使者と運動の働きを明らかにしている。道を備える使者とエリヤはいずれも三重の適用として密接に関係しており、同様にローマの三重の適用もバビロンの陥落の三重の適用と密接に関係している。しかし、それらには神の裁きに関わる重要な相違点がある。

エリヤの三重の適用と、契約の使者のために道を備える使者の三重の適用は、神が、その選ばれた使者と、その使者のメッセージに結びつく運動を通して成し遂げる二つの別個の審判のわざに関連している。これら二つのわざは二つの異なる審判の期間に結びついているが、象徴の間には重なりがある。

第三にして最後のエリヤの働きは、現代バビロンの三者連合に対する執行審判に関わっており、道を備える使者の働きは、神の民の調査審判と清めに関わっている。マラキ書3章は、2章の最後の節によって導入されている。

あなたがたは、あなたがたの言葉で主を疲れさせた。なおもあなたがたは言う、「どのことで私たちは主を疲れさせたのか」と。あなたがたが「悪を行う者はだれでも主の目に良い者で、主は彼らを喜ばれる」と言い、また「さばきの神はどこにおられるのか」と言うからだ。見よ、わたしはわたしの使者を遣わす。彼はわたしの前に道を備える。あなたがたが求めている主は、突然、その神殿に来られる。あなたがたが喜びとする契約の使者も。見よ、彼は来る、と万軍の主は言われる。しかし、彼の来る日をだれが耐えうるか。彼が現れるとき、だれが立っていられようか。彼は精錬する者の火のようで、洗い工の石けんのようだからである。彼は精錬する者、銀を清める者として座し、レビの子らを清め、彼らを金や銀のように精錬し、彼らが義にかなったささげ物を主にささげることができるようにする。そのとき、ユダとエルサレムのささげ物は、昔の日々、いにしえの年々のように、主に喜ばれるものとなる。マラキ 2:17-3:4.

終わりの日には、マラキの証言によれば、神は、1888年の反乱に固執するラオディキア的アドベンティズムによって疲れさせられている。1888年の反乱は、コラ、ダタン、アビラムの反乱によって型示されており、コラの反乱における教理上の争点は、悪を行う者が主の御前でなお義とみなされるのかどうか、ということであった。

さて、レビの子ケハトの子イツハルの子であるコラと、エリアブの子らであるダタンとアビラム、またペレトの子であるオン、すなわちルベンの子らが、人々を引き連れ、彼らは、イスラエルの子らのうちから、会衆の指導者で、会衆の中で名高い者たち二百五十人をも伴って、モーセに対して立ち上がった。彼らはモーセとアロンに逆らって集まり、彼らに言った。「あなたがたは行き過ぎだ。会衆は皆、一人ひとりが聖で、主が彼らのただ中におられる。それなのに、なぜあなたがたは主の会衆の上に自らを高めるのか。」民数記 16:1-3

終わりの時代に、神は、1957年の反逆にしがみついたラオデキヤ的なアドベンティズムに倦み疲れておられるが、それは単に、1888年の反逆が公式声明という形にされた現れにすぎない。書籍『Questions on Doctrine』は、1888年の反逆を定着させたが、これはコラ、ダタン、アビラムの反逆の繰り返しであった。これは、コラの反逆の歴史の繰り返しを記録するために1888年の会議に留まらなければならないとホワイト姉妹に指示した天使の証言によるものである。名ある二百五十人が、コラ、ダタン、アビラムとともに集まり、反逆において神の代表であるモーセに敵対した。

エゼキエル書第八章で太陽にひれ伏す二十五人の男たちは、コラ、ダタン、アビラムの反逆において香をささげた二百五十人の什一、すなわち十分の一を表しており、これは1888年の反逆の指導者たちを象徴していて、その教理上の反逆は1957年、『Questions on Doctrine』という本の刊行によって公式化された。

コラ、ダタン、アビラムの反逆は、神が下し、彼らに四十年間荒野をさまようと言った「裁き」を退けた。ラオデキヤ的なアドベンチスト運動は、1856年に示されたラオデキヤのメッセージを退けたのち、1863年にラオデキヤの荒野をさまよい始めた。その結果、彼らの信仰の欠如のために、さらに多くの年月にわたり荒野をさまようという裁きもたらされた。1888年の反逆においても、彼らはジョーンズ長老とワグナー長老によってもたらされたラオデキヤのメッセージをなおも受け入れようとしなかった。

1888年に反抗した者たちは、ジョーンズ長老とワグナー長老の霊的権威だけでなく、女預言者エレン・ホワイトの権威と聖霊の権威までも退けた。というのも、会衆全体が等しく聖なるという考えを行動で示したからである。

1863年、彼らはベテルの偽預言者と共に食事をするために戻り、その結果、最終的にコラの反乱に象徴される救いの定義を受け入れ、さらにその誤った教理を書籍『Questions on Doctrine』において公式に明文化した。その教理は「信仰による義認」の誤った定義である。

1863年の反乱は、ハバクク書の二つの板に映し出されていたミラーの宝石の拒絶の始まりであった。ハバクク書第2章では、1節の「論争」が、遅れたメッセージをめぐる不一致によって明らかにされる二種類の礼拝者を最終的に生み出す。

見よ、彼の魂は高ぶっており、彼のうちに正しくない。しかし、義人は自分の信仰によって生きる。ハバクク書 2:4.

ハバクク書2章の「論争」における「義人」の「信仰」は、板に明確に書き記された「幻」に基づいていた。1863年の反逆において、板に書かれていたものを取り除くための最初

の一步は、「義人」の信仰をもはや持っていない者たちによって成し遂げられた。1863年の反逆は、最終的に1957年に信仰による義認の教理に対する誤った定義を確立することになる反逆の最初の萌芽をなしていた。

次回の記事でこの研究を続けます。

主はその大いなるあわれみによって、ワグナー長老とジョーンズ長老を通して、ご自分の民にきわめて尊いメッセージをお送りになった。このメッセージは、世の前に、掲げられた救い主、すなわち全世界の罪のためのいけにえを、いっそう明確に示すためのものであった。これは、保証者なる方を信じる信仰による義認を掲げ、神のすべての戒めへの従順のうちに現されるキリストの義を受け取るよう、人々を招いた。多くの者はイエスを見失っていた。彼らは、その神なるお方ご自身、その功績、そして人類に対する変わらぬ愛に目を向け直す必要があった。すべての力は主の御手にゆだねられており、主は人々に豊かな賜物を分け与え、無力な人間にご自身の義というかけがえのない賜物を授けるのである。これこそ、神が世に与えるよう命じられたメッセージである。これは第三天使のメッセージであり、大声で宣べ伝えられ、豊かな御霊の注ぎを伴って示されるべきものである。Testimonies to Ministers, 91.

この時代の真理である第三の天使のメッセージは、私たちが大いなる最後の試練に近づくにつれて、ますます力を増して大声で宣べ伝えられなければならない。『1888年資料集』1710頁。

「試練の時はまさに私たちの目前に迫っている。というのも、罪を赦す贖い主であるキリストの義の啓示において、第三の天使の大いなる叫びはすでに始まっているからである。これは、その栄光が全地を満たす天使の光の始まりである。」『Selected Messages』第1巻、362頁。

後の雨は神の民の上に降り注ぐ。力ある天使が天から下ってきて、全地はその栄光で照らされる。『Review and Herald』1891年4月21日。